



# アーサー王ロマンス

2

## アーサー王ロマンス

井村君江

ちくま文庫



9784480026118



1910197005803

ISBN4-480-02611-8

C0197 P580E



定価580円(本体563円)

戦いと愛と聖なるものを主題  
にくり広げられる一大中世英  
雄ロマンス。円卓の騎士たち  
と聖杯探求の旅、王妃グィネ  
ヴィアと湖の騎士ランスロッ  
トの恋、トリスタンとイゾル

デの悲恋など、神秘と謎に満  
ちた悲劇の英雄の物語。  
きわめて分かりやすい、アー  
サー王入門にうってつけの一  
冊。

アーサー王が黒い騎士の難問を解く

ある時アーサー王が、カーライルの城で法廷を開いていたときのことです。一人の若い婦人が王の前に出て、こう訴えました。

「わたしの愛する人が、黒い騎士のために捕えられてしまいました。その騎士はわたしの父の領土まで奪ってしまったのです。どうぞわたしの失ったものを、おとりもどしく下さいませ」

王はこの訴えを聞きますと、すぐにエクスキャリバーをとりあげ、馬に鞍を置き、急いでその黒い騎士の住む城へと出かけました。

間もなくアーサー王は、その城に着きますと、一騎打ちの勝負をいどみました。ところがこの城は、イングルウッドの魔の森に建っていましたので、城に足をふみ入れると、たちまち手足がしびれ力がぬけて、剣をぬくこともできません。アーサー王はその黒い騎士に捕えられてしまいました。黒い騎士は剣の先をアーサー王の胸元につきつける、こう言ったのです。

「このまま殺すのではおもしろくない。アーサー、おまえに一つ難問を出そう、今日から一年のち、再びこの城に帰って来て、わしが出す質問に答えるという約束をするならば、放してやろう。『婦人がもっとも望むものは何か』というのがその質問だ。正しい答えができなかったら、おまえはわしの家来となり、おまえの領地はわしのものとなるのだ」

それから一年のあいだ、アーサー王は国じゅうを馬で行き、会う人ごとに婦人が望むものは何かをたずねました。ある人は富だ、と言いました。ある者は栄華と身分でしょう、と言いました。陽気に暮らすこと、ほめられること、花のような騎士を夫に持つこと、などさまざまな返事が返ってきて、いったいどれが本当の答えか、決めがたく困っていました。

こうして一年の月日も過ぎていき、あと数日となったある日のこと、王は思いに沈み

ながら森の中を通って行きますと、ある樹の根元に座っている一人の婦人に声をかけられました。見ると、真っ赤な服から出ている手は木のように節くれ立ち、その顔は怪物のように醜く、この世のものとも思われませんでした。王は思わず顔をそむけ通りすぎようとしています。

「何というお方でしょう。わたしにも言わずに通りすぎようとなさるとは——わたしはこんな顔ですけど、あなたの難問を解いてあげられるかも知れませんよ」

「もしそうしてくださるなら、あなたが望むお礼を差しあげましょう」

「ではきつと、誓ってくださいよ、あなたの真心にかけて——」

言われるままにアーサー王が誓いますと、その醜い婦人はアーサー王の耳の中に答えをささやいてくれました。そこでアーサー王が帰りかけますと、婦人は王の袖をつかまえて、彼女にお礼を欲しいと言いました。

「わたしの夫として、美しく礼儀をわきまえた騎士を一人探してくださいな」

王は婦人に未来の夫を連れてくることを約束しますと、急いで恐ろしい黒い騎士の城へ出かけました。一番最後の答えをとっておいてから、次々にたくさんの方々が言った答えを並べていきました。

「アーサー、降参するか、正しい答えは出来ないようだ、おまえとその領土をとりあげ

るぞー」

そこでアーサー王は、とっときの答えを言いました。

「けさ森のなかで、わたしは醜い婦人に会った。樫の木と柊ひいらぎの青葉のあいだに、真っ赤な服を着て座っていた。『女はだれでも、自分の思いを通したい』これがあらゆる婦人の望みだと言った。さあ、これでおまえへの借りは返したぞ」

これを聞くと黒い騎士は、無念そうに叫びました。その声はイングルウッドに響きました。

「それはおれの妹だ！ きさまに秘密をあかしたやつは。ええ、いまましい！ いかこの仕返しはしてくれようぞ！」

#### 醜い婦人とガウエイン卿の結婚

アーサー王は城へ帰りましたが、あの醜い婦人に、若くりっぱな騎士を夫にやると約束したことを思い出して、胸をいためていました。この心配をガウエイン卿に打ち明けますと、

「王よ、ご心配なさいますな、わたくしがその醜い婦人とやらと結婚いたしましょう」と言いましたので、王は驚き、

「いやいや、ガウエイン卿よ、おまえはわたしの姉の子、あの醜い婦人はひどすぎる」と言いましたが、ガウエイン卿が言い張りますので、心ならずも王は承知したのでした。一度誓った約束は、破ることが出来なかつたからです。

そこで翌日、王は騎士を従えて森に行き、あの醜い婦人を宮廷に連れて来ました。人々はその婦人のあまりの醜さに驚き、結婚するガウエイン卿はどうかしているなどといろいろなかげ口をききましたが、ガウエイン卿はじつとがまんして結婚式は終わりました。しかし、祝宴は開かれませんでした。

夜になって二人きりになりますと、ガウエインは深いためいきをつきました。そのようすを見た婦人がわけをたずねましたので、率直に言いました。

「そのわけは三つ、おまえの年と、おまえの醜さと、おまえの生まれのいやしさとだ」とすると婦人はいやがりもせず、こう説明しました。

「年齢の多い者には分別がありますわ。醜ければ他の男に奪われる心配がありません。また生まれの上下で、その人の気品は左右されるものではなく、その人の性質によるのです」

このときふとふり返りますと、なんと、あの醜い婦人は消え、そこには金髪と白い肌の美しい婦人が微笑んでいるではありませんか。ガウエイン卿は驚き、目を見張りまし

た。じつはあの醜い姿は、魔法使いにかけられた呪いのためであり、二つの事が起こるまでは、解けなかったのです。それがいま、若く優れた騎士を夫にすることという条件の一つが、かなえられたので、魔法が半分解けたのです。

「これから半日だけ、こうした本当の姿でいられます。でもあなたは、わたしが昼のうち美しく夜醜くなる方がいいでしょうか、あるいは夜美しく、昼醜い姿の方がよろしいでしょうか？」

こう言われてガウエイン卿は、

「わたしは夜になって、おまえと二人きりになったとき、おまえが美しい方がいいと思う」

と答えましたが、婦人がそれに反対し、

「でも、昼間、大勢の騎士や貴婦人がたの間におりますときに、美しい姿でいられる方が、わたしにはうれしいのですけれど——」

と言いましたので、ガウエイン卿は素直に婦人の意志を尊重して、自分の意志はすてました。するとこの時、二番目の条件が満たされましたので、魔法はすっかり解けたのです。

「あなたがわたしの意見を通してくださったので、魔法はすっかり解けて、夜も昼も、

もうこのままでいられるようになりましたわ」

婦人は頬を紅くそめ、アンズのような黒い瞳はひかり、唇は桜のつぼみのようにふくらんでいました。ガウエイン卿は、その雪のように白いうなじに口づけをして忠誠を誓ったのです。妹の魔法が解けると、兄をしばっていた呪いも解けて、恐ろしく残忍な黒い騎士は、アーサー王の円卓の騎士のように、勇ましくりっぱな騎士にかわりました。